

「哲学を手稿とアーカイヴの視点から見る」

(2024年7月15日、成城大学)

村瀬 鋼

国際編集文献学研究センターでは、2024年7月15日の15時から17時30分にかけて、フランス国立科学研究センター（CNRS: Centre National de la Recherche Scientifique）のベネデッタ・ザッカレロ（Benedetta Zaccarello）氏を講演者にお招きし、氏の講演とそれを受けてのディスカッションとから成るイベント「哲学を手稿とアーカイヴの視点から見る（Philosophy from the Standpoint of their Manuscripts and Archives）」を開催した（於・成城大学9号館グローバルラウンジ）。以下はその報告である。

ザッカレロ氏はフランス国立科学研究センターの研究員で、同センターの現代テキスト草稿研究所（ITEM: Institut des Textes et Manuscrits Modernes）のコーディネーターとして、アーカイヴや手稿を通じた現代哲学・現代文学の研究に従事してきている。大きな業績としては、ヴァレリーの『カイエ』（Paul Valéry, *Cahiers 1894-1914*, 13vols., Gallimard, 1987-2016）の共同編集やメルロ＝ポンティの1953年のコレージュ・ド・フランス講義録『言語の文学的用法の研究』（Maurice Merleau-Ponty, *Recherches sur l'usage littéraire du langage*, Métis, 2013）の編集・解説などがあり、当イベント開催の時期には世界各地のアーカイヴや研究所と連携した国際研究ネットワーク、AITIA（International Research Network, “Archives of International Theory, an Intercultural Approach”）プロジェクトを主導的に推進していた。

ザッカレロ氏のこのような研究活動は、当センターの研究領域である編集文献学と大きく重なり合うところがあるものであるため、当センターとしては、今回、氏の幸運な来日の機会を利用して、氏の講演を中心にディスカッションを交えて氏の知見を広く分かち合うためのイベントを企画した。

ディスカッションの参加者は、日本におけるヴァレリー研究の第一人者で以前からザッカレロ氏と共同研究者として交流のある塚本昌則氏（東京大学人文社会系研究科教授）、パスカル研究者としてよく知られる山上浩嗣氏（大阪大学大学院人文科学研究科教授・当センター特別研究員）、メルロ＝ポンティ研究に携わってきた村瀬（筆者、成城大学教授、当センター研究員）の三名に、司会を兼ねて、当センターのセンター長である明星聖子（カフカ研究、成城大学教授）が加わった。

プログラムの前半は、ザッカレロ氏による英語での講演「哲学の手稿とアーカイヴから何を学ぶのか（What can we learn from philosophical manuscripts and archives?）」であった（翻訳を同時映写）。一時間ほどのこの講演のなかで、氏は、哲学手稿という、手稿一般のなかでも一種独特な性格を持つ手稿の研究のその独特さと、これをめぐる諸問題と諸課題について、一方では自身の研究活動とその経験とに基づきながら、他方では現在進行形の研究の未来に向けての展望へと開く仕方で、簡略ながらも豊富な内容を含む総括的な見取り図を提示してくれた。その概略はおおよそ次のようなものである（以

下、鍵括弧内は口頭で読まれた講演原稿からの引用)¹。

手稿一般は、アーカイヴの編集と整理に携わる専門化たちの長年の労苦を経て、近年、徐々にアクセス可能になりつつある。しかしそのようななかでも、哲学手稿は、文学手稿以上によく知られていない対象であり、その抽象的で難解な内容だけからしても、すでに読解が困難な資料である。手稿の解読はきわめて粘り強い作業を必要とする。そこでは、これといって定まった方法や技術が用意されているわけではない。すぐには見えてこない多くの情報を知覚するためには、まずは手稿に長時間触れて手稿と「懇意になる (get acquainted)」必要があり、哲学者ごとの独特の癖を持った資料体を手探りで解読していかなければならないのだ。その知は、そのただ一人の作者・哲学者にこそ適用可能な種類の「熟練知」なのであって、他の研究者への伝達も困難であれば、他の哲学者への転用も困難なものである。

ただこのような探求がもたらしてくれる認識は豊かなものである。一般に、哲学の思考は孤独な哲学者の抽象的な思弁と見做されがちなところがあるが、刊行されたテキストでは消えてしまっている、手稿に認められる諸々の修正や抹消や付記や記号や図表、諸々の備忘や逡巡や選択や留保の意味を一つ一つ拾い上げていくと、哲学のこの一見孤独な営みは、実際には、歴史と同時代との具体的な対話を通じた様々な他者との協働作業でもあるということが次第に見えてくる。氏が編集に取り組んだメルロ＝ポンティの講義に関する手稿もそうであったように、そこには同時代の聴衆や同僚たちとの関係に絡む理論的と言うよりは実践的な問題も織り込まれている。「哲学者たちは、自分のテキストを練るにあたって、自分が直面する文化的・理論的遺産のイメージを、その遺産を受諾するにせよ論駁するにせよ、恒常的に産み出した創り直す。そうである限り、哲学と呼ばれるものは、たんに生きた経験に根差し実存的視点に立脚した創造的な思考行為であるだけでなく、自分自身の文化とのしばしば明白な対話を含むテキスト上の生産行為なのである」。問題なのは、たんに理論としての哲学の歴史のみではなく、哲学の文章をその一部として含む様々な言語実践の重量と絡み合いでもある。そこで、手稿に折り畳まれた諸々の襞を開いていくにつれて「抽象的な思考がいかにして多層的な言語の織物 (multi-layered fabric of language) を相手取った作業に淵源しているかがあらわになってくる」。かくして、アーカイヴの研究を通じて、ひとは「理論的思考の進化というものを、じかに経験された具体的冒険として、学問の歴史というものを、ダイナミックで集団的なプロセスとして」捉えられるようになるのである。

自身、特にはヴァレリーとメルロ＝ポンティの手稿に取り組んできた経験から汲み出された以上のような知見から、まさにヴァレリーとメルロ＝ポンティ自身の哲学と文学とについての交叉しあう関係の理解を捉え直すようにして、氏は、一方では、哲学のテキストをたんなる哲学以上の豊かな文学的テキストとして解読し直そうとするとともに、他方では、理論の洗練と諸概念の彫琢とへ向かうものとしての哲学の特殊性を再考しようとしているように思われる。氏は哲学手稿の研究の持つ性格を、次のように簡潔に要約する。「思想家の手稿の観点から見れば、哲学は、出版された一連の作品というよりも、

¹ 講演内容の詳細については本誌本号所収のザッカレロ氏の論稿を参照されたい。

再定式化の継続的のプロセスに沿った抽象的な語彙の産出の問題であるように思われる。このような観点からすると、アーカイヴを通じた哲学の書きものの研究は、文学的な手稿の分析とも、印刷された書物や思想史を根拠とする諸理論の研究とも、異なる研究分野であるように思われる」。

このような研究に取り組もうとする者に必要な基本的な理解と実践とは何か。それはおおまかに言えば次のようなものであることになろう。

手稿は、多次元的な空間に置かれた多次元的な対象である。一つのコーパスとしてのその存在は、資料のネットワークという形を持っており、このネットワークは、可能な分類、基準、支持体、表象に従って、潜在的に無限の方法でブラウズすることができる。手稿とアーカイヴの立場からすれば、理論という言語的媒体は、書物を読むことの線状性に比してより高度な複雑性を持った装置の一部なのであり、この装置においては、これらの多次元的な対象はテキストの担い手であると同時に生身の資料でもあって、情報は多方向的な通路を横断して展開する。読者の立場からは、テキストの概念的な理解のほかに、思考を言葉にする際のこのような多層的な提示の複雑さを把握する能力が求められる。

手稿ないしその集合体としてのコーパス（資料体）は、それがたとえ孤高の哲学者の残した資料であったとしても、単独のものとして他から孤立させられるものではなく、それ自体が、他へと開かれた一つの、ないし本来的に複数のでもある「ネットワーク」なのである。このような「ネットワーク」の複雑な網の目を、決して単一ではない仕方様々に辿ってみること、これが手稿の解読の、ほとんど方法なき方法とでも言うべきものであることになろうか。

このような認識のもと、氏は、氏が携わる研究プロジェクトそれ自身の方向性として、この「ネットワーク」の最大限の広がりを考えようとする、一見して異様な可能性と困難さと思わせるアイデアを提示する。氏は言う、「われわれは、単一のコーパスを扱うのではなく、哲学者たちのネットワーク全体を扱う研究を想像してみることもできるだろう」と。それは、世界中の、いまはまだ孤立している諸々のアーカイヴやコーパスを接続し、いまはまだ孤立して作業をしている数多の研究者やアーキヴィストたちを連携させる、開放的な企てということになるだろう。

氏の関わるこの具体的なプロジェクト、国際研究ネットワーク AITIA は、2020年に開始され、この講演後、2024年末に終了することになったのだが、講演では、講演全体の締め括りとして、このプロジェクトの当時の状況と併せてその未来の展望が紹介された。

このプロジェクトの目的は、次の四つである。

1. 国際的なワークショップを開催し、さまざまな理論分野の学者、アーキヴィスト、デジタル・ヒューマニティーズの専門家による国際的なネットワークを構築すること。
2. このような知識を用いて、理論的手稿の研究、解釈、デジタル・エディションに特化した新しい方法論的ツールを開発すること。

3. このようなコーパスに埋め込まれたストーリーを、文化史とその遺産の理解を深める手段として出現させるようなデジタル戦略を開発すること。

4. 理論的アーカイヴが本質的にトランスナショナルでトランスカルチュラルな次元にあること、そして有形無形の文化遺産として重要であること明確化すること。

氏によれば、「理論における革新は常に、多様な伝統、多様な文化的視野、多様な学派、多様な言語圏などの間の相互受粉という形をとる。このように、アーカイヴの研究は、国家的・個別専門的・共同体主義的な地平に代わる政治的な路線を浮き彫りにし、哲学と理論のアーカイヴは、理論家を、旅行者として、翻訳者として、文化の仲介者として、提示することになる」。最後に氏は、未来に向けての国や分野を超えた対話の重要性を訴えて、講演は閉じられた。

講演終了後には、小休止の後、ザッカレロ氏を中心に塚本氏、山上氏、村瀬、明星が登壇し、一時間ほどディスカッションの時間が持たれた。塚本氏はヴァレリー研究の立場から、山上氏はパスカル研究の立場から、村瀬はメルロ＝ポンティ研究の立場から、明星はカフカ研究の立場から、それぞれザッカレロ氏の講演内容に応答するコメントと質問とを提示し、ザッカレロ氏との間に刺激的で有意義な質疑応答が持たれた。その間、たんに個別の作家・哲学者の研究に関する事柄のみならず、デジタル化が進むアーカイヴの状況一般について、その現状と未来とについての意見が取り交わされ、それぞれの認識と見解が有益な仕方でも共有されたと思う。特に山上氏は、ザッカレロ氏の講演に対するたんなるコメントや質問の枠を超えて、パスカルの手稿についての最新の研究状況を丁寧に整理し、当の手稿そのものの画像をも交えて細かく紹介してくれた²が、これは今回のイベント全体にとってきわめて有益なことであった。と言うのは、ザッカレロ氏の講演が、具体的事例の提示を省いた、一般的状況についての相対的に抽象的・理論的な説明であったため、山上氏の話題提供がザッカレロ氏が理論的骨格を描いた哲学的・文学的テキストの手稿研究のきわめて具体的な実例としてこれと良いカップルを成し、手稿とアーカイヴの観点から見られた哲学という今回のテーマそのものを立体的に見せてくれることになったからである。

登壇者の間での遣り取りの後、対話がフロアに開かれた。登壇者を除いた参加者の人数は約二〇名ほどであったが、数名から興味深い質問とコメントが提示され、登壇者との間で活発な議論がなされた。

今回のイベント全体を総合的に評価するならば、幸運な機会に恵まれて、手稿とアーカイヴ研究の分野で国際的にリーダーシップを執りうる立場にいる研究者であるザッカレロ氏を招き、その知見に親しく触れるとともに、氏と当センターの연구원や関連の研究者・学生との間で生産的な対話を持つことができた、きわめて有意義な会であったと言えるだろう。

2 山上氏の実際の報告内容については、本誌本号所収の山上氏の論稿を参照されたい。